

## 専門委員会開催報告

専門委員会名	平成 28 年度第 1 回「シグマ」特別専門委員会
開催日時	平成 29 年 2 月 28 日 13:30-15:30
開催場所	東工大大岡山地区北 2 号館 6 階会議室（先導原子力研究所）
参加人数	18 名 千葉主査、岩本寛治、横山幹事、相川委員、青山委員、伊頭委員、池田委員、池原委員、熊田委員、今野委員、柴田委員、原田委員、平山委員、深堀委員、水野氏(福田委員代理)、山野委員、吉岡委員、河野講師
議 事	<p>1. 今年度の活動経過</p> <p>2015, 2016 年度のシグマ委員会の活動について千葉主査より説明が行われた。本 2 年間は、本委員会を 2 回、国際会議 CNR 及び 2016 年度核データ研究会の共催を行うと共に、学会における総合講演・報告及び企画セッションを単独、あるいは核データ部会、炉物理部会と共催したことが報告された。次回は札幌で総合報告を行う。また核データニュースを核データ部会と協力して 111～116 号まで発行した。学会から部会に配布される費用が来年度は 10 万円に増額される可能性について説明された。</p> <p>2. トピックス</p> <p>広い意味での核データ分野の情報共有のため、講師 2 名より最近の研究トピックスの解説をいただいた。</p> <p>2.1 中性子共鳴分光法の革新（JAEA 原田 秀郎氏）</p> <p>原子力機構の原田秀郎委員より中性子共鳴分光法の最近の進展についての解説が行われた。通常は速中性子場での使用が困難な Ge 検出器を適切な遮蔽と中性子飛行時間法と組み合わせることにより、中性子断面積の高精度測定が可能となり、それにより培われた技術を発展させて革新的な非破壊分析技術の開発が行われて来ている。それにより原子力学会賞や文部科学大臣表彰などを受けたことが報告された。小型中性子源での測定可能性や中性子検出器をマトリクス化して二次元分布を測定する可能性などについて議論された。</p> <p>2.2 米国における核データ研究活動の現状（LANL 河野 俊彦氏）</p> <p>米国ロスアラモス国立研究所・上級研究員で、現在東工大 World Research Hub Initiative プログラムで特任教授として東工大に滞在中の河野俊彦氏より、米国における核データ研究活動についての解説が行われた。DANCE や ChiNu 等の中性子入射反応測定用の高性能スペクトロメータによる測定の現状や、それに対応できる統計モデルコード（決定論的及びモンテカルロ法）の整備状況、統計理論における進展などについて説明された。核分裂即発<math>\gamma</math>線スペクトルデータの重要性とその整備状況等についての議論が行われた。</p> <p>3. シグマ委員会の延長について</p>

	<p>千葉主査よりシグマ委員会の延長について議論された。資料3は原子力学会に提出した延長申請書であるが、次期主査及びメンバーについては、十分な時間がなかったため本期と同じ陣容で申請したことが説明された。希望があれば主査の交代を行うことを説明したが特に希望者はおらず、そのまま申請することが了承された。原子力学会での説明は3月9日である。</p> <p>核データ部会長の深堀 智生氏より、シグマ委員会に対して、「核データ研究のあるべき姿及びそのための道筋（核データロードマップ）」の検討を依頼したいこと、及び学会誌 ATOMOΣ における核データ部会担当の連載講座執筆における監修を依頼したいことが説明され、了承された。</p> <p>4. その他</p> <p>委員の交代希望があれば後継の委員の指名とともに主査まで連絡するよう依頼された。シグマ委員会は予算の制約もありなかなか実のある活動が難しいが、原子力を含むいろいろな大規模外部予算に協力して申請できるような議論や、原子力の人材育成への協力体制構築を希望する旨が主査より説明された。</p> <p>以上</p>
備考	